

人間はな、ものを造るから尊いんだ！

職業への道

劇映画 カラー 37分



企画 貯蓄増強中央委員会

製作 株式会社 桜映画社



製作意図

最近の勤労青少年は、就職後3年間に50%は離転職するといわれている。その解決の一助として青少年の生活設計というものを考えてみたい。

若い人達が職場に定着するとき、平坦な道をたどるにせよ、曲折をたどるにせよ、ついには働く生き甲斐を掴んでいる。この映画では、ものをつくる喜びがあって、それが働くということ、生きるということの手ごたえとなっており、こうした生き甲斐なくしては働く者の健全な生活設計はありえないということを強調しようとしたものである。

あらすじ

田島安夫は16才。あかね硝子工業所に勤めてそろそろ1年になる。昼間働き、夜は夜間高校で勉強する、いわゆる勤労学生である。彼には思いやりのある先輩吉田がいる。

吉田は、やはり働きながら短大まで卒業した。安夫を見ていると、相談する相手もなくみじめな毎日を送っていた数年前の自分自身を見ているようで、何かにつけて安夫のことが気になるらしい。

寮の同室者小石は、ドライな現代っ子で世渡りが

うまい。会社に内密で喫茶店のアルバイトをしているところを、中間試験をさぼった安夫に見つかって「残業なんておかしくってできるかい、ここで2、3時間も働いたら倍にはなる。」とケロツとしている。

その帰り道、安夫は、若い女を無理矢理車に乗せようとしているチンピラ風の男とやりあった。日頃の不満が爆発してか、傍で茫然と見ている小石を尻目に、必死に武者振りついたが、怪我をしてしまう。

心配した吉田が翌日寮を訪ねてみると、安夫は絆創膏を額に浮かない顔をしている。吉田に「仕事が辛いか」と聞かれても黙って首を振るだけ。

安夫がこの頃疑問に思っているのは、苦勞して夜間を卒業して、それが仕事の役に立つのかということだった。ただガラス玉を吹くだけの単調極まりのない今の仕事に、学校の勉強がどう役に立つというのか。小石の言うように、学校を出たからといって給料がはねあがるわけでもない。

思い切ってこのことを吉田に話してみるが、勉強はしておくにこしたことはないとの、らちのない答え。安夫の気持は判然としない。

そんな気持で、安夫は、中学時代の友達で、美容師を目指して働いている澄子を訪ねた。希望に胸ふくらませ、甲斐々々しく働く澄子に励まされて、自分も頑張らなくてはという気持になる。

翌日、中間試験を受けなかったことがばれて、安夫は吉田に、「点数などはどこかの大学を受験する奴に任せときゃいいんだ」とどやされる。

しかし一方で、吉田は、小石が与える影響を考えて安夫のために、部屋替えを社長にかけあうが、やっと半人前にした小石に辞められては困る、会社は慈善事業をしているのではないからと社長は動かない。

それをふと立ち聞いた安夫は、会社を飛び出してしまう。

行くあてもなく、ふと眼にした店員急募の貼紙を頼りに、一度はパチンコ屋に勤めるがうまくいかず、同郷の澄子の勤める美容院のママさんの紹介で陶器店に住み込む。

が、夜も仕事で学校にも行けず、定休日は月2回という労働条件の上、個人経営の商店では公私の別もない。それに、お客様相手の仕事は、内気で、まだ都会慣れしていない安夫にはうまくいかず、女店員からは嫌味を言われる。

店先に並んだガラスの花びんを手に、思い出すのは「人間はな、物を造るから尊いんだ。例え鍋や釜でもだ」という吉田の言葉と、額に汗して働いたあかね硝子のあの熔解炉の真赤な火だった。

そんなある日、安夫は過って花びんを割ってしまう。泣きたい気持のところへ、吉田がひょっこり訪ねて来た。わざわざ社内預金の通帳を届けに来てくれたのだ。

安夫は、懐しきの余り、今までこらえにこらえていたものがいっぺんにせきを切って、吉田の胸に泣き伏してしまう。

そして、その吉田の口から、小石が会社を辞めたこと、安夫と小石に辞められて会社も新しい経営方針を打ち出すのにやっきになっていることを知らされる。

数日後、安夫はあかね硝子にもどった。ちょうどその日、会社は従業員の企業への参加意識を高めるため、自社株式の一部を希望者に保有させる新しい持株制度の採用を掲示していた。

吉田たちの口添えもあって、社長は安夫の復職を快く認めてくれた。

「一人前のガラス技術者にしてやるから覚悟しろ」という工

場長の言葉に、安夫は決意に燃えた眼差で応える。

安夫の歩んだ道は無駄ではなかった。十年の後は、立派なガラス技術者が生まれることだろう。

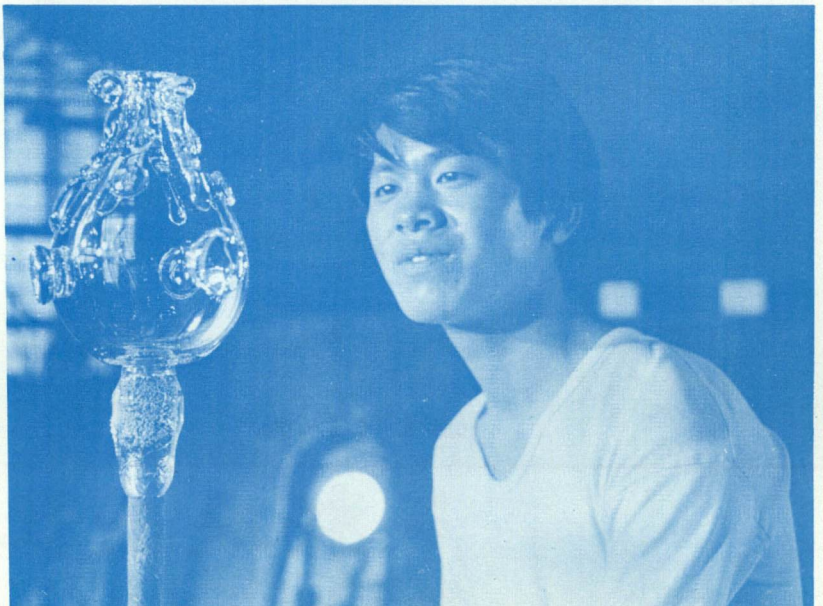
「職業への道」寸考

監督 堀内 甲

職業とは何か？ 人間ならば誰でも労働の義務があるとすれば、それは背負って生きなければならぬ業であってはならない。

生きる喜び、職業とはそれにつながるものでありたい。

ところが、現代は職業が余りに分化、機械化され、人間は其中で磨耗してゆく一つの部品にすぎなくなっている感じさえする今日、この映画を監督しながら、私は自分の職業を改めて反芻させられた。



この映画を見て |||

★青少年の職業遍歴を通して人間の生き方、仕事への定着の問題など話し合いへの材料となるべき点が多い。
(映画評論家 大内秀邦氏)

★働く青少年の悩みと生活を垣間見た気がする。彼らが真に求めているものは“働く喜び”以外の何物でもないことがわかった。どうかして彼らの望みを叶えてやれないものか……私たち大人の責任でもある。

（大企業 労務管理課員）

★私たちが忘れてしまっている「職業とは何か」という問題を、若くて純粋な安男の迷いを通して、改めて考え直させられました。

自分にも一度は、安男と同じように悩み、苦しんだ日のあったことを思い出し、同時に、いつの間にか惰性と諦めのうちに安住し切っている自分に気がつきました。

少年のどうにもならない気持ちがよく出ていると思います。(23才 会社員)

★中学卒業ぐらいで就職する少年のあわれさみたい
なものがよく出ていて、涙が出た。

とかく使う方は手助け、人手としてだけ見て、そういう考えに慣れてしまうが、年少者の立場に立っても考えてみなければならないと思う。

私どもの地域にも勤労少年の会があるので、是非見せたい。
(世田谷区 主婦)

★我が子もあの少年のようにひとりぼっちで苦しんでいるのかと思うと、親として傍についてやれないことが申し訳ない気がします。

どんなに淋しい思いで床に就くことが、あのシーンには臉が熱くなりました。

(山形県 ある母親)



利用のすすめ

この映画が企業者側にも考える材料となり、若年労働者と呼ばれる諸君にも映画の中の少年の体験を繰り返すようなムダな試行錯誤を少しでも排することに役立つことを願っている。

また、中学、高校でも、職業案内の参考として活用できると思う。

製作スタッフ

製	作	村	山	英	治
脚	本	利	光	久	輝
監	督	堀	内	茂	甲
撮	影	千	葉		樹
照	明	堀	内	和	甲
助	督	村	山	征	雄
音	樂	神	谷	二	徹
編	集	神	山	勝	郎
		長	沢		俊
		浅	井		弘

出 演

一準子彦
正文寅
島藤旗田
平近降浜
誠清哉子
森下井恵
宮木永馬

株式会社

株式 桜映画社

東京都新宿区西新宿1-22-1 スタンダード・ビル
電話 03 (342) 5 7 6 8 番 (代表)

16ミリ 頒布価格

¥ 190,000